きつねやぶものがたり

むかしむかし、三納村の南の方角へ百メートルほど行ったところの木呂川沿いにすすき、熊笹などがたくさん茂っている小さな丘がありました。

この小さな丘にはクルミやグミ、イチジクなどの実のなる木そして大きな柳などもあり、ちょっとした森のようなところでした。

この丘の中ほどには小さな洞穴がありました。ここにいつの頃からか、狐が棲みついていました。丘の東側には大きな木呂川そしてもう一方に支流の瀬木川が流れていたため、狐にとって、ここはとても安全で棲みよいところでした。

狐が棲みついていたことから村人たちは、このあたりを『きつねやぶ』と呼んでいました。

このきつねやぶの横には瀬木川の取入れを利用した水車小屋がありました。
村の人たちはこの水車小屋で粉引きや藁打ちなど、水車を使う仕事を家ごとに順番を決めてやっていました。

この水車小屋へときどきふらりと狐が遊びにやってくることがありました。
この狐は村の田んぼや畑、あぜ道からねずみやモグラを獲ってきてはそれを水車小屋で仕事している村人に見せたりしたので、村の人たちはこの狐は田畑を食い荒らす生き物を獲ってくれる自分たち百姓のだいじな仲間のように思っていました。

しかし、このかしこい狐は水車小屋へ仕事にやってくる村の人にも良い人悪い人がいることを知っていました。

良い人はお昼弁当などのおすそ分けをくれる人。悪い人は、けちでなにもくれず、逆に追っ払おうとする人でした。
この狐はときどき、矢作の大道に出かけ、道をとおる人にいたずらをすることがありました。

†

秋祭りが近づいたある日、村のごんべさんが尾山のまちへ祭りの買出しに出かけました。
背中には、おっかさんとふたりでこつこつ夜なべ仕事で作った沢山のわらぞうりの束があります。
あさ早くに尾山のまちへ着いたごんべさん。知り合いの家など一軒づつをまわって、「わらぞうり♪！わらぞうりいらんかね～、丈夫で長持ちするわらぞうーり～♪」と大声をだして売り歩きました。

ごんべさんのぞうりは尾山のまちで「丈夫で長持ちする」と前から評判になっていたのでまたたく間に売り切れてしまいました。

ごんべさんはぞうりを売ったお金を持って市場へ買い物に行きました。

おっかさんにたのまれた秋祭りの御馳走に使う「はべん」「油揚げ」「こんにゃく」や「さとう」「塩」などを買い揃えました。それにぞうりが高く売れたのでおっかさんと子どもたちへのお土産もいっしょに買いました。

ごんべさん、朝早く家を出たのですが、尾山の街中を歩き回り、親類などへの用事もしていたので帰る頃には、お日様も西に傾きはじめていました。

途中の野々市の町へついた頃には周りがもう薄暗くなっていました。

一日歩き回り、さすがにおなかのすいたごんべさん、おなじみの居酒屋へちょっと寄っていくことにしました。

お店でおつまみを食べ、お酒をすこし飲んだごんべさん。元気をとりもどしほろ酔い気分で野々市から矢作をとおり鶴来に通じる大道を歩きはじめました。

東の空にはおおきな十五夜のお月さんが出ています。

ごんべさんが野々市の町外れ、矢作境に来た時、街道脇の松の木陰から、「ごんべさん、ごんべさん！」と呼ぶ声が聞こえます。

ごんべさん、呼ばれた声のほうを見てびっくり！

これまでに逢ったことないほどのきれいな女の人が、これまたきれいな着物姿でそこに立っていました。

「ごんべさん！そんなにびっくりしなくても～、そんなに急いで

帰らなくても〜、ちょっと私のところへ寄っていらっしゃいよ！♪」
その甘い、やさしい声についついその気になったごんべさん。きれいな女の人にさそわれるままに案内された家に入りました。通された部屋には秋を感じさせる清楚な白い野菊の花が一輪、床の間に飾ってあります。

「あのね、ごんべさんはやさしい人。いつもお世話になっているから今夜はお返しがしたいの！♪」、わけが解らないけど、きれいな女においしいお酒や、御馳走をたくさんふるまわれたごんべさん、ご機嫌いっぱいになりました。
帰りにはお土産にと、大きなマツタケと鶏の肉までもらいました。

ほろよい気分でたのしくになった、ごんべさん。
月夜の大道を鼻歌まじり。夢心地で家路につきました。

家に着いたごんべさん、早速おっかさんに今日の出来事と帰り道にきれいな女に御馳走してもらったことを楽しくに話して聞かせました。
おっかさんは祭りの料理にりっぱなマツタケと鶏の肉も加わったので大喜び「あんたって、やっぱりいい人なんだね！」とにっこり。

†

翌朝、隣に住むやんべさん。朝からごんべさん夫婦がニコニコ楽しく話し合っていたので何がいいことあったのだろうか(?)と聞きに来ました。
正直者のごんべさん、ゆうべの出来事を隠さずに話しました。

うらやましくなったやんべさん。自分も早速、まねしようと、日頃から口うるさいおっかと喧嘩しながら編んだわらぞうりの束を担ぎ、尾山のまちへ出かけました。
やんべさんのぞうりはいつもがさつに作られ、出来が悪かったので人の評判はあまりよく

ありません。それでも昼ごろ遅くにはなんとかぞうりを売り切ることが出来ました。

ごんべさんと同じように市場に出かけて祭りの材料などを口汚く、値切って買い揃えたやんべさん。そのあとは親類などへの挨拶まわりもしましたが、ごんべさん以上にいい思いをしようと考えていたので挨拶などはいい加減でした。

やんべさんも日が落ちる頃、野々市の町に着きました。けちなやんべさん、おなかが空いていたが我慢して野々市の町外れ、松の木のところまでやってきました。

今夜の月は曇って、夜道はあまり明るくはありません。

松の木陰から「やんべさん、やんべさん」と呼ぶ声「そんなに急いで帰らないで、私のところでおいしいお酒でもいかが？」薄明かりのなかで、女の人が呼びとめます。

やんべさん、「しめしめ、おいしい酒が飲めるぞ、御馳走が腹いっぱいくえるぞ！」、腹ペコのやんべさん。女の顔や着物姿などはどっちでもいいはなし。

女の勧めるがままに部屋に入ります。

床の間には枯れた野菊が一輪さびしく飾ってあります。

やんべさんはそんなことはおかまいなし。お酒を飲み御馳走をたらふく食べました。

飲みそして食べ疲れたやんべさん、やがて眠くなってきました。

「やんべさん」、「今夜は泊まっていってもいいけど、ちょっと布団敷きますよ。その間、お風呂に入ってくださいな～」女に言われ、眠気眼のやんべさん、案内された露天風呂(？)に入りました。

「この風呂なんかぬるいな～。それにちょっと変なにおいがするな！」とぶつぶつ。

しかしお酒を飲んで疲れていたやんべさん、いつの間にやらそのお風呂でうとうと。

†

つぎの朝、田んぼ仕事に出てきた隣村は矢作のお百姓さん。田んぼ脇の古い肥溜め跡の水溜りに入ってのんびり寝ているやんべさんを見つけびっくり！

「おーい、そんなとこ入って何しとるんじゃ？」

矢作の人に呼び起こされたやんべさん。自分がどこに入っていたか判ってびっくり。急いで外へ出たが、着ていた着物が見つかりません。

しかたなく近くの小川へ飛び込んだが恥ずかしいやら体が臭いやら～もうたいへん。

水がつめたいけどしばらく外へも出られない！

矢作の人、そんなやんべさんを見て一言「あんたも、やっぱり狐にだまされたんかいの～？」

といって、すたこらと田んぼ仕事に行ってしまいました。

裸のまま、くしゃみをしながらもなんとか家にたどり着いたやんべさん。

おっかに「えらい、ひどい目にあった。狐にだまされたぞ！多分、きつねやぶの狐の仕業じゃ～」とくどいた。

おっかも「あたしもあの狐、大嫌いじゃ、うちの油揚げ盗んでいったことある！」ねたみ根性の強いやんべさん夫婦、そのあともなにやらぶつぶつと言い合っていました。

それからしばらくたった或る日。

きつねやぶにある狐の洞穴が壊され、埋められてしまいました。

棲むところが無くなった狐はその日のうちに何処かへいってしまいました。

†

次の年、三納村の田んぼや畑に、どこから来たのかと思うほどにねずみやモグラが増え、作物を食い荒らし、あぜ道を穴だらけにして村の人達を困らせました。

村の人達はやんべさん夫婦が狐を追い出したことを知っています。

みんなから白い目で見られるようになったやんべさん夫婦。
やがて村にいづらくなり、こそこそと村から出て行きました

不思議な事にやんべさん夫婦が村から出ていくと入れ替わるように、きつねやぶに白い毛の狐がすむようになりました

この狐が来てからは、村の人たちを困らせていた田んぼや畑そしてあぜ道などにいたねずみやモグラがまたたくまに少なくなりました。

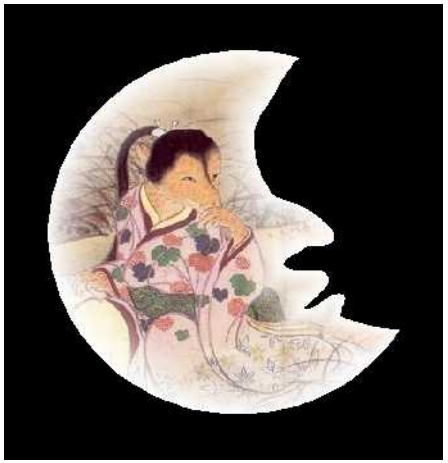
おかげで村の作物は豊作が続き、人たちの生活もずいぶんと豊かになりました。

†

さて、このようなことがあってから村の人達はきつねやぶの狐は田畑を守る神様のお使いだと信じるようになり、これまで以上に狐を大切に守りました。

そして家族・村人お互いが仲良く暮らし。
人の悪口を言ったり、いじわるなどをしないよう気をつけるようになりましたとさ。

めでたし、めでたし。



《その後の話》

三納村の鎮社、日下日吉神社はお稲荷様ではありません。しかし「白い狐」と「茶色の狐」が神殿の厨子観音扉に描かれています。

村には

『家族仲良く暮らし、一生懸命働き良い行いをしていれば神様がきつねを使ってごほうびを下さる。』

『家族が仲たがいして悪口言い合ったり人に悪い事をすると神様はきつねを使って懲らしめる。』と言い伝えられていました。

しかし、いつ頃からか、この言い伝えも忘れられるようになりました。

修復復元された厨子（野々市町重要文化財指定）

日下日吉神社新築を祝う

平成十九年、百二十数年ぶりに神社全面新築がされました。この工事に併せ、傷んでいた神殿厨子の修理もされました。

ここでびっくりしたのはこれまでだれも気づかなかった厨子観音扉に「美しい狐」が描かれていたことです。

「美しい狐」はいつの時代か何かの事情があり箔で隠されました。

この度の修復にあたり、京都の専門家に見ていただいたところ、その「美しい狐」が現れたのです。神社工事にかかわった関係者一同、再度「美しい狐」を箔で隠そうか？と思案しました。しかし、今の時代、何も隠す事は無い。ご先祖が残してくれた「宝物」はそのまま見せて、後世へ言い伝えることが大切というになりました。

このたびの日下日吉神社新築工事にかかわり、合計六回の神事祭が執り行われました。

幸運な事にこの間、どの儀式もすべてが良い天気に恵まれました。

祭事の直前まで雨だった場合も祭事が始まると見事に晴れてきました。

特に六月十五日の上棟式には雌雄の雉が境内に舞い降り、祝賀してくれるというハプニングもありました。

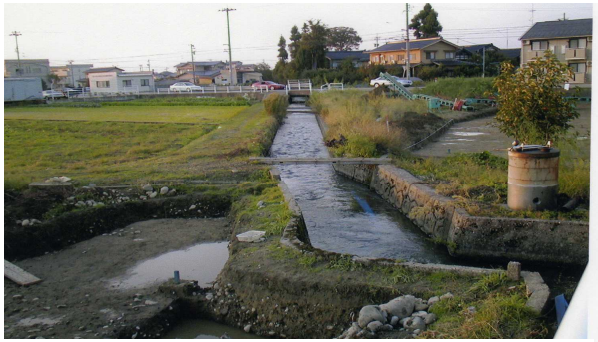
一〇月十四日の子供みこし祭りと竣工慶賀祭は見事な秋晴れとなりました。
とくに喜ばしいことは十ヵ月に及んだ工事は全て安全無事におわったことです。
これはひとえに三納日下日吉神社氏神様のおかげと信じたいものです。

平成一九年一〇月吉日

『狐藪水門石碑』
「きつねやぶ」の場所にあったが
昭和後半に神社境内へ移設

『小宮さん』
昔から、安産・子宝に恵まれるという
言い伝えがあります。

《きつねやぶの関係資料》



「きつねやぶ」と呼ばれた処
昭和２０年代まで狐藪水門が此処にあった

平成十三年十月五日付け新聞
遺跡調査で水車跡見つかったことを伝える

晴れ舞台で力示せ

ビッグ人選手ら壮行式

廃材で水車の土台?

クルクル再利用

木製枠組み発掘